

淡路こども園における療育実践 IX

(1) いわゆる問題行動(拒食、自傷行為)について

名倉 啓太郎 松村 昌子 岩崎 隆彦 ○加藤 啓一郎 芝田 友吾
(大阪府立大学) (淡路こども園)

これまでの一連の発表(淡路こども園における療育実践I~IX)において我々は、障害児療育における生活発達療育仮説の実践的検証を重ねてきた。本報告では同様の視点から障害児の問題行動について検討を加える。

問題行動に対する対応として一般的によく行われている方法としては対症療法的行動療法があるが、これはある症状の直接的な消失を目的とした対応で、表面的には問題行動とされる症状は消失し、改善、治癒されたと考えられるが、その問題の背景にある根本的な問題の心的状態が改善されない限り、異なる問題行動が新たに出現することが多い。一方、問題行動を認め、受けとめる対応(いわゆる受容的対応)が存在するが、解決の見通しをもたれないままに表面的な受容に終ることが多く、問題行動が消失しないまま、対応が打ち切られることが多い。我々は子どもも問題行動という形で訴えてくる意味内容を、実存的、発達の視点からとらえ対応してゆくことによつて、本質的にその問題行動の根底が変化し、より了解しやすい姿へと変貌してゆくと考えている。以下、事例研究を通してこれらの点を検討する。

<事例>

A児(男児) 自由性発達遅滞児。乳児期離乳後、全体的に乳児期的な特徴をもつ。就学まで当園に措置。就学後一年内外来相談で登園。就学後、顔を前後、左右にふる行動が出てくる。家の中で突然怒り、床をどんとどんとたたく等の行動が出現。9才の時点で言語が未獲得。自傷行為、拒食をするに及んで再び来談。

生育歴 新生児素直強い。筋緊張低い。乳児期は大人しく、運動発達全般的に遅れが認められ、1才から3才まで歩行訓練を行なう。歩けるようになるが、人を求めず、視線を合わない。

家族 母親は家業を手伝い、忙しい時期にはA児にまで手がまわらないことが多い。A児の障害が重度であることから父親、母親ともにあきらめの気持ちがあり、乳出産後(A児5才以後)は弟の育児に手がかかる。A児にと、ては苦しい状況が続く。

経過 表1参照

<考察>

本事例において、相談再開当初の激しい自傷行為は、

いろいろな状況で出てくる興奮を自らの頭をたたくことによつて相殺しているかの印象を手えた。それに続く拒食状態ではエネルギーが低下し、まさに生きる意欲をなくしたかと思われるほどであった。これとともに興味が全般的に退行し、活動性が低下する。これらの状態はなほほ諦めの気持ちを抱いていた家族を悩死の思いにさせ、母親が親身になり、てA児と向き合うにつれて徐々に活動的になり、水遊びや屋外への興味が再び出てくる。手をひ、ぼるなど動作での伝達も場面によつて現れるようになる。警戒心が徐々にとれ、母親を求める気持ちが強まる。てゆくとともに情緒的に安定し、自傷行為が消失する。A児の感情表出もわかりやすく受け入れやすいものへと変化し、操作的な遊びなど、興味も外へ向かう、という経過をたどった。

拒食、自傷行為— 健康乳児との比較

拒食、自傷行為が消失してゆく過程を健康乳児期の感情表出の発達過程と比較して考えると(図1参照)、健康児の場合、乳児期初期における生理的、反射的な表出は養育者の側に対応する養育的感懐と育児行動を引起させ、それによつて乳児は満足を得る。このような関係の中で(1)情緒的な安定をもたられ、(2)感情表出そのものもわかりやすく受け入れやすい、人向らしい表出になつてくる。(3)表出が徐々に意図的なものになつてくる(意図性の増大)。(4)情緒的な安定とともに外界への興味も進展する。拒食、自傷とは、まさに人との関係から閉ざされた状態であり、自由性発達遅滞児の場合、その感情表出、自我発達にやがみ、これがあるが、養育者の母性的なかわりによつて不安、緊張が解消されるに従つて、健康乳児と同様の筋道を通つて人の世界への仲間入りをし、人向らしい感情表出をするようになると思われる。

図1 感情表出の発達過程

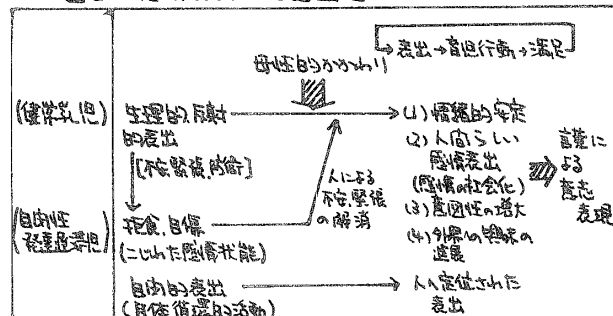


表1 A児の療育相談経過

	子どもの様子	母親・家族の様子	職員の内面
自傷・拒食(活動性の極端な低下)	夏休みに入り、学校のプールへ3度ほど行くが、激しい自傷行為が発生する。拒食の状態が5日間続き、水分もあまりとらないため点滴。母親がつきまわし看護すると食べるようになるが、家の外へは一切出なくなる。自傷も減少するが、母親が家業の手伝いで再び本居から離れると又自傷が増える。 夏休みの終り頃、母子ともにこども園へ登園。7月頃から中心に水遊びと笑顔が多くなるが、9月に入り登園すると又調子を崩し、家に内泊になる(登校拒否)。操作の指遊び、水遊び(飲むことも多い)、自傷行為に至るまで一切はなくなり(活動性の極端な低下)。部屋の中で母親にもたれこ座っている。ビデオには興味を持ち、動きのある場面を笑い出したりするが突然泣いて顔を見たりする。	父親・母親はA児の自傷行為、それに続く拒食に対し非常にショックを受ける。 父親は一時期母親が家業を手伝うべくともいふようにし(その後仕事と整理)、母親は何となく食べられない、と必死で看病する。	自傷行為、拒食というA児の必死の行状を母親自身も受け止めるよう話しをする
信頼関係の漸進的回復と興味の進展	興味はビデオを中心だが、他のビデオが見たい時、母親の手にビデオを押さず、手ごしらえにより、必要に応じてやりやさい行動が出てくる。自傷は夏休みの時ほど数回減るが、突然泣きだすことも多い。 座っている時、上体を前後に揺る動作が出てくる。常同行動のため、人々を引きよせ、揺らすような要求することもある。部屋の中では走り回り、移動するときも静かでない。部屋の中だと何かに興味がある様子。と母親を引っ張ること増える。 水遊びに興味を持ち始め、庭へ出て遊ぶ。母親がついていくとすると又怪しくなる。禁止される、という警戒心があるようで、母親が自ら庭で水遊びをするのを徐々に母親に近づくようになり、庭へも入る。2人で歩くようになる。水遊びは楽しむことが中心で、小道具の量も遊びの広げに増える。時に下では自傷も出るようになる。 母親が台所で用事をしているとき泣いて手をひいたりにくるなど、母親を求めるとき増加する。屋外へ誘いかけることも出る。自転車に乗せてもらうことになり、帰り道で家を近づくと突然泣きだすことがある(強い自傷)。帰路と果てるとして自傷がおさまる。何故かこれを繰り返すが、自傷の意味が全般的に感情状態に対応する反応から限定された状況に対応する反応へと変化してきたように思われる。	母親は思い通りにいかない。A児の現状や先行きの心配ばかりで、そればかり。また、新しいことに挑戦したときにA児と接し、その結果、子どもの成長を促すが、父親の理解が増えたことでも、徐々に1日一晩に過ごすことは生活の中で自分の感情をコントロールしながらA児と接し、していくようになる。 父親の方も転居による仕事と家庭を分離することが重要に見える。	週3回の割合で、訪問し、A児の状態にあわせてアドバイスを続ける。しかし、自傷、拒食は減ったが、活動性が低下している。A児の情緒的な安定を計りながら、母親がA児の話を聞いて、このことやこれを見ての表裏のくみとりをして通して明確にし、よくアドバイスする。母親の心を受け止め、その見直しをはかる母親自身が、その上で支えてやる。学校の養育士も同じく、この間、養育士と協力して母親を支えていくよう話しあう。
情緒的な安定と外界への興味の進展	自傷行為が完全に消失する。去年まではホームワークを出すと中に必ずしもいたが、今はなくなり、母親の側にいる。おしゃべりやおもしろいものに興味を示すようになり、ビデオを徐々に見るようになる。水遊びはよくするが、水の感触を楽しみたいようになり、水を飲む量を減らしてくる。 ものの注視、人の注視がしっかりとでき、しっかりと見ることができるようになる。正面を向かいあった時、部屋に入ってきた時、声がかけた時は他人を見ることを増える。 偏食が強くなったが徐々に食べるものが増えていく。 母親が外出して父親がA児をみるようになってきた。母親が怒るときと喜んで抱かれる。母親の後述にかかわらず、トイレなどの話しかけにも無理なくのびやかになる。また母親の膝に乗っていると押しのけて自分でおぼろげとすることも出てくる。 園歌をいきなり母親が歌を聴かせつけ、飲ませると又おしゃべりするが、無理に歌を聞かせないようにすると食事の回復する。	夏休みや夜ほかに父親が自らA児とかわるようになる。 母親もA児の気持ちにあわせてかわるよう自ら工夫する部分が出てくる。	情緒的にかなり安定し、興味も内部感覚的なものから外部世界へと広がっていき、母親を支えとなり、A児の興味にあわせてかわるようになる。母親との関係も深まり、このまま家で物理的にA児との距離をできる場合でも、心理的な距離はより密着にするよう、声かけなどのアドバイスをします。